

国頭村へき地校の安波小参観及び佐手小における集合学習の参観

北海道教育大学旭川校、坂井誠亮先生と高橋亜希子先生が12月10日～11日までの2日間、国頭村の教育委員会の訪問と安波小・佐手小（北国小との集合学習）を訪問されました。10日の午前中に国頭村教育委員会としての施策の説明と、安波小の授業風景を参加させて頂きました。

また、11日の午前中は急きょ決まった国頭中学校の訪問と午後より国頭村の学力向上推進委員会の実践報告会までご参加いただきました。

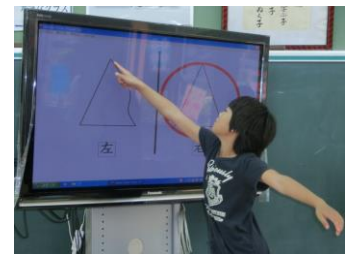
なぜ、国頭村へ？

平成25年1月「学びの共同体」冬季セミナー（静岡県伊東）において、国頭村教育委員会の取り組みと、村内の実践校の様子を報告させて頂き、さらに佐藤学先生が全国の講演会で、沖縄の国頭村が頑張っているとお話され、全国の大学等からの国頭村訪問が続いている状況です。なんと、10月にはインドネシア訪問団（約30名）。台湾訪問団（約20名）も受け入れることができました。村内の各学校の校長先生や先生方のご理解とご協力にほんとうに心より感謝します。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

4校時の授業に合わせ安波小を訪問した。始め校長先生から15分ほど学校の説明を受け、3教室の授業を参観させて頂いた。

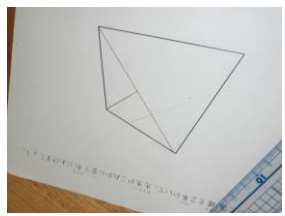


めぐさん：これは三角形じゃないよ、だってこの線がまっすぐじゃないもん。ふにゃふにゃだもん。…そのとおり！

デジタルTVでテキストを提示し、課題が下ろされたら、勝手に学び合っていく。「分からなければ訊く」「聴かれたら寄り添う」確かめや、まちがいも子ども達で解決していく。授業者は多くを語らず、簡単に答えに導こうともしない。「仲間で支え合う」ことが大前提である。

課題：2本の線を引いて3つの三角形を作らなさい。

私の考えを語るさくらさん。さらに違う解答例がある。違うから学びの価値がある。安波小の子どもたちは、違っていても決して卑屈にならないのが素晴らしい。



3, 4年生である。普段は二人だが、本日は一人が風邪のため4年生一人の授業である。もしかして学級閉鎖？…教師と子ども1対1の授業である。

授業者は本年度に赴任にしたばかりであるが、学び合う授業づくりに日々奮闘している。

1対1という厳しい状況の中でも教師は、子どもの考えを引出し、学びの深まりを探っていく。



5年生はいない、6年生二人の単式学級である。

課題：水に溶けたものの重さはどうなるだろう。食塩を水に溶かしながら、水の重さと溶けた食塩の関係を調べる。二人の協同作業になる。若菜さんから思わぬつぶやきが出た。

「10gって案外多いね」そう、日常生活のなかで10gの単位というのはなかなか体験できる機会がないのが現実である。

「10gってこのくらいか」小さくて大きい学びである。



《給食も一緒にさせていただきました》



食堂のないへき地なので、訪問には弁当を持参で出かけました。授業参観後の給食に弁当持参でずうずうしく一緒にさせていただきました。へき地のかわいい子どもたちとの昼食にお二人方もご満悦の様子でした。

高橋先生が1・2年生相手に北海道の今「雪景色」の写真スマホで見せると子ども達が飛びついた。子ども達の興味津々に見入る聴き入る姿に、なぜか高橋先生が嬉しそうなお顔である。写真一つを媒体に人がつながるシーンでもある。子ども達は「雪・氷・寒さ」について勝手に語る優しく受け入れて応える高橋先生である。

《佐手小訪問》 佐手小、北國小集合学習。2校は、算数の授業を学年



単式にするため週2回、集合学習が行われている。今日は日程を調整してもらい午後の授業に設定してもらった。

なんという心遣い、遠く北海道からの訪問者への「おもてなし」である。

さて、右の手前の二人の男の子は、佐手小と北國小の二人である。このくっつき具合どうですか。今日突然できるわけでもない、つまり日常だから自然に寄り添えるのである。



《佐手小、北國小 1年生授業風景》



今日は、午後からの授業であるが1年生もがんばっている。

「〇〇さんの前に口名います。〇〇さんは、何番目になるでしょう。」

教師の分かりやすい教具の準備が子ども達の学びを促進させる。

語る、語る、互いの気づきや「なんで？」が自分の言葉で語られ、対話的コミュニケーションが図られる。



中央は北國小の子である

《佐手小、北國小 4年生授業風景》 小数の割り算

小数で割ることの意味の追求になる。4年生は佐手小が2名、北國小が1名である。授業者は北國小の先生が担当している。小数の計算では、「掛け算は小数点が右に移動し、割り算は小数点が左に移動する。」等のテストや試験のための受験数学的に納得させて終わってしまう傾向がときどき見受けられる。

男の子の商が、割られる数より大きな数になってしまった。「あれ？」である。

ここはじっくりやりたい。授業者は臍に落ちない仲間への説明を、子ども達にあずけた。

「0.68は0.1が6つと0.01が8つなの、だから0.68は0.01が68こなの…それから考えると・・・」仲間を納得させるために更なる説明が続く。授業者は両者の距離感を縮め、やり取りを見守る（右写真）。



日本最北端の北海道から、南島沖縄県の最北の国頭村へ、村の教育施策の話や、それぞれの学校の実践を参観させてくれませんかとの依頼がきた。「え～北海道からですか。」正直言って「本気ですか？」と伺いたかったです。まさに「遠路はるばる」である。「学びの共同体」がネットワークでつながる、佐藤学先生を通じて、国頭村の情報が北海道まで届き、今回の訪問となった。佐手小学校、安波小学校の校長先生や職員には遠方からの訪問者に快く理解を示し受け入れられたことに、心より感謝申しあげ敬意を表します。感謝！感謝です。

「観たい人が来る。」自らの学びを求めて「お話を聞かせてください。」「授業を拝見させてください。」謙虚な姿勢で依頼がくる。私は「可能な限り」を前提に、村内の各学校や校長先生方に理解を求める。訪問者が来ることで、教師たちも今一度「学び直し」が図られる機会となる。「学校や教室はつねに開かれていなければならないものである。」学校訪問受け入れも一つの理念の追求である。